ことばの意味とこころ

漢字に学ぶ

父、父たり――母は慕に通ず

〝父〟という字は古い字形は〝 〟で、手に杖か何かをもった形を表わしたものと見られています。私は、それは杖ではなく斧だと思います。なぜなら〝斤〟が斧の本字で、それが斧の形を表わしていて、斧の〝父〟はその発音を表わす音符だからです。つまり〝斧〟の発音が〝フ〟なので、父を音符として斤に加えて〝斧〟という字形になったものです。ついでに言いますと、このように意味（形）を表わす字と発音（声）を表わす音符とで作られた字を〝形声字〟と言います。（漢字の九十パーセントがこの形声字ですから、漢字をその構成から考えますと、初めて見る字でも、その意味や発音がほぼ推察することが出来るわけです）。このように〝父〟と〝斧〟とが同じ発音の言葉であるということから、父とは斧を持って働く人、『家族を養うために働く、責任ある人』という意味の字だ

と私は思います。電気もガスもない昔は、木を切る仕事ほど切実な仕事はなく、その仕事を率先してするのが昔の父の仕事だったのです。斉の景公が孔子に政治の要諦を尋ねたその答えに『父、父たり』という言葉がありますが、それは『父が父らしくある』という事で、それは家族に率先して働く人を意味していると思います。だから、家族に信頼されるだけの働きのない父親は、父の名に値しないことになります。次に〝母〟という字は、古い字形は〝女〟に〝・・〟（二つの乳房を示す）を加えたもので、子供を産み育てる女性を表わしたものです。この字の発音はボ（慕）ですが、子供に誰よりも慕われる存在であることを表わしているとと思います。だから、子供から慕われないような女親は〝母〟としての資格がないと言えます。

論語には『父、父たり、子、子たり』とだけあって『母、母たり』とありませんが、母が慕われる母でないようですと、子も立派な子になり得ないということは言うまでもありません。

学習と勉強の違い

学習という言葉と勉強という言葉と、よく同じ意味のように使われていますが、ほんとうはかなり違った意味の言葉で、ぜひ使い分けてほしい言葉です。

学習は、論語冒頭の『学而時習之』の学と習を合わせて作った言葉で、『亦不悦乎』と

続くように、自ら進んでやるものです。これに対して勉強は、ちゅうように『勉強而行之』とありますように、苦しいのを我慢してやるものです。勉が『早く免れたくて努力する』という意味を表しています。

さて学の旧字体 學 は、××と臼と 子 の合字です。子 は宀で、無知に閉ざされた子（蒙昧な子）を、臼は臼で両手を、×× （交） は弟子と師父と交わる意味と、この言葉の発音（コウ＝カウ→カク＝ガク）を表わしています。

つまり学は、弟子が師父と交わり、その長所をまねる（効）ことにより、自ら蒙を啓くこと（また師父が助けて啓蒙してやること）を表わしたものです。

習は羽（羽で羽の形）と白（百の本字）との会意字です。白は親指の形を象ったものと言われ、親指一本で百の意味を表現したところから数の百を表わしたと言われます。

白（しろ）は日光を表わした指示字で、数の 白（ひゃく） とは同形の異字と見るべきでしょう。それで、

その混同を避けるため、数の白に一を加えて百としたものでしょう。さて、習は、何度も何度も羽ばたくという意味の字で、雛鳥が羽ばたく練習をして飛べるようにすることを表わしたものです。

論語の意味は、師の長所をいいなと思い真似（まねぶ→まなぶ）て、それを繰返していると、それまで出来なかったことが出来るようになる。なんと悦ばしいことではないか、という意味の句です。幼児を見ていますと、真似ること（学）も繰り返すこと（習）も実に好きで上手です。だから、学習は、人間の本性に基づく本能で、従って楽しいのがほんとうだと思います。

経済（けいざい）は経世済民（けいせいさいみん）の略語（りゃくご）

政経塾の〝政経〟という言葉が、〝政治経済〟の略語であることは説明するまでもないほど明らかなことですが、〝経済〟と言う言葉が〝経世済民〟の略語であることは、知らない人が多いのではないかと思います。

経世とは国家を経営する意味の〝経国〟と同じ意味の言葉で、世を治めること、斉民とは人民を救済すること、人民の生活を豊かにすることを表わした言葉です。

さて〝世〟と言う字は十を三つ重ねた字で、古くは〝卅〟とも書きました。人間の世界は三十年でひとまわりします。三十年前に子供だった人も三十年たつとちょうどその年ごろの子供をもつ親になっているはずです。それで十を三つ重ねた〝世〟という字で、人間の一代（一世代）を表わし、わが子のことを〝二世〟と言うわけです。

〝経〟という字は、本字が〝巠〟で、これは織機に張られた〝たて糸〟を表わした象形字です。従って、〝たて糸〟が本義ですが、転じて広く〝縦〟に〝まっすぐなもの〟を表わす部首として使われるようになり、〝たて糸〟には〝經（経）〟が作られました。

〝経営〟とは、建築にあたってまず経を張って土台を定めることで、転じて広く事業の大もとを定め、事業を営むことを表わすようになりました。

織物はたて糸によこ糸（緯）が往復して織られます。経が基本になるので、基本になる大切な書物を〝経書〟〝経典〟と呼びます。仏教で〝お経〟というのは〝経書〟の略語で

す。巠を部首とする字に〝莖（茎）・脛・頸・径・軽〟等があります。茎は植物の縦にまっすぐな〝くき〟、脛は体の中で縦にまっすぐな〝すね〟、頸は〝くび〟を表わしています。径は、つづら折りの山道を直線につなぐ近道のことです。（直径は円周に対し、まっすぐな近道です）このような小道を通ることの出来る車が〝軽〟です。いわゆる軽快な車のことで、今では単に〝かるい〟意味に使われます。

十干十二支と暦（じっかんじゅうにし　こよみ）

昭和五十九年の年賀状に〝甲子元旦〟と書いた方がいらっしゃったと思います。前年は癸亥の年で六十年で還暦するその最後の年でしたが、昭和五十九年は甲子、六十年の最初の年です。昔は年ばかりでなく、日も十干十二支で表しました、干は幹の意で甲乙丙丁戊己庚辛壬癸とあり、支は枝の意で子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥とあります。十干と十二支を組み合わせますと六十組できますので、六十一年目で初めに還ります。前回の甲子の年は大正十三年で、この年完成した球場は甲子園と名づけられました。

甲子は古くは〝カッシ〟と読まれましたが、今では〝コウシ〟と読みます。これと別に〝きのえね〟という読み方があります。十干を木火土金水の五行にあて、甲と乙は木に配せられ、前者を〝え（兄）〟後者を〝と（弟）〟としたことによります。従って甲は木の兄ということです。

さて、甲は、穀物の種が殻を覆った姿でわずかに根を伸ばし始めた形で、十干の最初にふさわしい字です。まだ殻に覆われている所から〝よろい〟の意に用いられ、また〝かぶと〟の意にも使われています。

元の儿は人の形(𠆢)をかたどったもので、その上の〝二〟は上という字の古い形です。それで元は人体の一番上の〝頭〟を表わしたものです。だから、〝元首〟とは頭首と同じ意味の言葉であり、〝元旦〟は一年の初頭の朝という意味の言葉です。

旦は太陽が地平線上に姿を見せた形で、〝あさ〟を表わしたものです。

新年の〝年〟は禾(稲の象形)と人との合字で、稔という字と同音同語です。稲は年に一度稔るところから〝年〟を表わすようになりました。〝ネン〟の発音は人(ニン)が表わしています。新は辛と木と斤(斧)との合字で、辛はシンの音を表わしています。木を斧で切ると、切り口が新鮮であることを表わしたものです。

建築の要(かなめ)は基本にあり

〝建築〟の〝建〟という字は『家を建てる』というように使われる〝たてる〟という訓の字ですが、〝聿(筆の本字)〟と〝廴(エンニョウ)〟とで作られていて、『筆を運び進める』という意味を表した字です。

〝聿は手(彐)に筆(丰)を持った形を表わした字で、筆の本字です。柄が竹で作られている所から〝⺮〟が加えられました。

〝廴〟は〝道を進む〟意味の部首で、従って、〝建〟は『筆を進める』つまり『意見を文書にまとめる』とか『計画をたてる』という意味の字です。建議・建策などと使われます。建築の〝建〟は、家を建てるに当たり、まずその設計図の『筆を進める』ことを表わした字です。建築の良し悪しは設計で決まると言われますが、その設計が〝建〟なのです。

〝築〟は訓が〝きづく〟ですが、これは〝木突く〟ことで家の土台をすえる地面を固めるため『木で突く』仕事を表わした字です。〝筑〟は竹で打ち鳴らす弦楽器の名前で、打ち鳴らす音の筑と木で、〝地固め〟することを表わしたものです。

今私たちは〝建築〟という言葉からは、地面の上にそそり建つ家の姿を思い浮かべますが、この言葉そのものは〝建〟は設計図を作ることであり、〝築〟は地固めすることであって、まったく目に見えない陰の最も大切な仕事を表わした字です。

『砂上の楼閣』という言葉がありますが、どんな楼閣でも、その土台がしっかりしていないと直ちに倒壊してしまいます。建築には地味な〝築〟が大切であり、さらには〝建〟が大切だということを教えられる言葉です。

大器（たいき）を育てる教育とは

『大人物は早熟ではなくて、晩（おそ）く成熟するものである』という意味で、『大器は晩成す』という言葉があります。この事は『万物の中で高等動物ほど成長が晩い』という事実からも推察されますが、複雑で大掛かりな機構になればなるほど、それを準備するのに要する期間は当然長くなるはずです。だから、この言葉は、大事業を企画し、これを興そうとする場合にも当てはまる言葉だ、と思います。『念には念を入れよ』という教訓も、またその反対の『せいては事をし損じる』という教訓も、この言葉に通ずると思います。ただここで一言断っておきたい事は、『それなら幼児に漢字を教える必要はないではないか』と

考えられる恐れがあることです。幼児の漢字教育を早期教育だとする人がありますが、それは全く違います、それは〝適時教育〟であって、決して早熟な子供を育てることを目的にしていませんし、人間の大切な幼少年期を無為に過ごさせる今の風潮に対して、最も充実した準備をすることに努めようとしているものです。換言すれば、いよいよ早熟化の進むこの俗世間から脱して、真の人間らしい人間になるための学問の準備がなされるよう、その基礎力である読書能力を育てることを目指すものであって、最も準備に重点を置いた教育なのです。これこそ大器を育てるための教育なのです。

さて、器は祭器を並べた形である𠙵と、犠牲の犬との会意字で〝祭器〟を表わした字です。昔は人物の器量をこの祭器になぞらえて『だれは何の器だ』と評したものです。それで人物を〝器量〟という言葉で評価するようになりました。男性では人徳や才能を、女性では〝容姿〟を言います。

晩は、日が免（まぬが）れるの意で〝日没〟を表わした字です。日の出を表した〝早〟と対をなす字です。例えば、早春、晩春など。今は速の反対の遅を、早の反対にも使っていますが、同じ〝はやい〟でも、早と速と概念が異なるように、晩と遅と概念が異なるので、使い分けたいものです。

成功の要諦（ようてい）は諦めぬこと

要諦とは『物事の最も大切な点』を言うのに用いられる言葉で、正しくは〝ヨウタイ（呉音）〟と読むべき言葉です。しかし、今では普通〝ヨウテイ（漢音）〟と読まれています。

要とは、人が両手を腰に当てている様子を表わした形の字で、今の〝腰〟の本字です。腰は人体の活動に最も大切な部分であるところから〝大切〟の意味に用いられるようになり、そのため別に〝腰〟という字が作られました。

諦とは、帝と言との会意形成字です。帝は天の神（天帝）を祭る台の形を表わした字で、〝天帝〟そのものを表わしたものです。転じて『天命を受けてこの世の支配者となった〝天子〟』の称に用いられるようになりました。従って、諦とは、天の神の言葉（天の声）という意味の字で、『唯一絶対の真理』を表現した言葉です。つまり〝諦める〟とは『真理を究明する』『真理を悟る』ことなのです。従って、〝あきらめる〟と読みますが、それは真理を明らめる』の〝あきらめる〟であって、『現に当面している悪い事態も、道理を究明することにより、それが当然の帰結であると理解し、納得し、その悪い事態を甘んじて受け入れる』というのが、ほんとうの〝諦める〟ことです。だから、これは〝暗愚〟な人では出来ないこと、〝賢明〟な人で初めて到達できる境地です。ところが、一般には『当面する悪い事態に絶望し、努力を放棄すること』を〝諦める〟と言っています。『諦めましたよ。もう諦めました。諦められぬと諦めました』という〝諦め〟は、実は〝明らめる〟ことではなくて、その反対の〝迷う〟ことであり、従って〝暗愚〟な人の態度であり、真

の〝諦め〟とは正反対です。

物事の要諦を究明して悟りの境地に達するのが真の〝諦め〟なのですから、簡単に〝諦める〟という言葉を使わないでほしいものです。

学問は〝飾り〟ではない

〝学問〟という言葉を知らない人はいないと思いますが、この言葉の本義を知っている人は意外に少ないと思います。例えば、書物を読むだけで学問していると思っている人がいます。それは〝学〟に属しはしますが〝問〟が存在しません。それにこの言葉は、単に学と問とを貼り合わせたものではありません。

中庸という書物に「博くこれを〝学〟び、審らかにこれを〝問〟い、慎んでこれを思い、明らかにこれを辨え、篤くこれを行う」とあります。人はまず博く学んで知識を広く持つ必要があります。狭いとそれだけ執らわれて、どうしても固陋に陥りがちです。しかし博く学ぶと当然理解できない事柄にもぶつかります。その時には、その道の先輩に納得の行くまで質し問うことが大切です。だがそれをそのまま受け入れるのではなく、それを一つの立場と考え、自分の頭で初めから筋を通して考え直してみる必要があります。そうすることによって初めて、それまでもやもやしていたものが一遍にふっ切れて頭がすっきり明朗になります。（朱子はこの時の状態を「手の舞い足の踏むを知らず」と表現しています）こうな

りますとそれを実践せずにはいられなくなります。これを「篤く行う」と言う訳です。

〝学問〟という言葉は、この初めの「博学、審問」から取ったものですが、それは「慎思、明辨」を経て「篤行」に至って完成するその一貫した行為の全体を表現したものです。

「論語読みの論語知らず」とは博く学んで知識を獲得することだけで〝学問〟だと思っている人の事です。疑問があっても放置し、従って〝思辨〟という過程を経ませんから真の〝知〟にならず、それで〝行〟に至らないのです。だから王陽明は〝行〟に至らない知は〝知〟とは言えないとし、「知行合一」を唱えました。書物が部屋の飾りだけであってはならないように、学問も身の飾りだけで終わらしてはなりません。

鑑（かがみ）でわが身を整える

鑑（かがみ）は今は鏡と書きますが、古くは鑑という字であり、さらに古くは監という字でした。その古い字形は𥁕です。𥁕は、目を大きく見開いた形を表わしたもので〝見張る〟のが本義の字です（今は〝見張る人〟つまり、〝家来＝家臣〟の意味に使われています）。𠂤は、人の形を表わし、皿は、皿に水がいっぱい張られていることを表わしたものです。それで監は「皿に張られた水に人が顔をうつして見る」ことを表わした字で、〝水かがみ〟を表わした字だということがわかると思います。昔は金属

で作った鏡は貴重でしたから、よほど高貴な人でないと、手に入れることが出来ませんでした。それで、〝かがみ〟と言えば、普通は〝水かがみ〟つまり監だった訳です。

水鏡は上から見おろして見るものですから、「見おろす」という意味にも使われます。高い所から見おろすと、大勢の人の行動でもよく分かるので〝監視〟〝監督〟という使い方が生まれました。また、高貴な人が見物する場合には高い所から見おろすので、高貴な人が見ることを「御覧になる」と言い、〝覧〟という字が作られました。

濫という字は、水鏡の水が外にあふれ出たことを表わした字で、〝度が過ぎる〟ことを表わしています。〝氾濫〟は川の水が外にあふれ出ることですが、〝濫読〟〝濫用〟は度が過ぎることを表わした言葉です（だから、〝乱読〟という書き方は賛成できません）。

人は、史書によって身に失敗がないように、行為を整えることを、鏡によって身に欠点のないよう容姿を整えることになぞらえ、史書に鑑という名をつけたものがあります（資治通鑑・東鑑・大鏡）。

『聖王の政治の在り方は史書に詳しく記載されていて、どうすれば良いかが解るが、所詮政治は為政者の人物如何に在る』と孔子が述べているように、鑑はあっても反省することが難しいため、人類は相変わらず興亡の歴史を繰り返しています。

家庭とは教育の場

家庭という字について考えてみたいと思います。

家という字は、屋根の形を表わした宀と、豚の本字である豕との会意字です。だから、本来は〝豚小屋〟を表わした字だと思いますが、今は人の住む所の意味に使われています。わが子を〝豚児〟と言いますように、自分の住まいを〝豚小屋〟つまり〝家〟と言ったと

ころから今の使い方が生まれたものではないでしょうか。

庭は、广と廷との会意形成字で〝宮殿前広場〟を表わした字で、古くは単に〝廷〟でした。天子が諸侯を朝見し、大臣の報告を聴く所で、だから〝朝廷〟とも言いました。廷は雨天の日には使えません。それで宮殿から屋根を前に張り出させました。これが〝庭〟です。广は、母屋から差し掛けた屋根の形を表わしたもので、店や庫という字にも使われています。

庭は、このように天子の宮殿前広場を表わした字であり、屋根付きの広場を表わした字ですが、今はだれの家の、屋根のない狭い場所でも〝庭〟と言い、家に必ずあるべき所とされ、〝家庭〟という言葉が生まれました。

家庭教育を表わした言葉に〝庭訓（ていきん）〟という言葉があります。昔、孔子は、庭にいて前を通りかかったわが子に「詩や礼を学んだか。もしまだであったら学びなさい」と教えました。これが、〝庭訓〟の由来です。

「君子はわが子を遠ざける」と言われていて、孔子も釈迦もわが子の教育に全く関与しなかったように思われていますが、この程度には心を配っていたのです。

〝遠ざける〟とは、べったりとくっつかないということで、一定の間隔を置いて、冷静にわが子を観察し、かつ教えていたのです。家庭とは、ただ親しみ睦み合うだけの場ではなくて、親が自分の体験をわが子に語り伝える大事な場でもあるのです。

教学相長ず（きょうがくあいちょう）

「教学相長ず」とは、「人間は教えることと学ぶことの両方で磨かれるものである」ことを表わした言葉で、古くから言われている「教ふるは学ぶことの半ばなり」という言葉とも相通ずるものがあります。

昭和二十八年、私は指導主事をやめて小学校の教師になり、一年生から六年生まで教えてみて、初めて「漢字はかなより易しいこと」「鳩は鳥より覚え易く、鳥は九より覚え易いこと」「一年生は六年生よりも漢字を覚えること」などそれまでの常識を破る事実を発見しました。こういう事は教えてみて初めて判ることで。「教えることは学ぶことである」と感じたものです。教という字は、古い字が〝敎〟ですが、これは〝斆〟の略字だと考えられています。学の古い字〝學〟も、〝斆〟が本字だという説があります。そうだとしますと、〝教〟と〝学〟とは、元は同じ字、同じ言葉だったということになります。それはともあれ、教と学とが表裏一体をなす言葉であることは間違いありません。教は、右の部分の攵が父の古い形と同じであるところから、父と子と××（交）との会意形成字と見ることが出来ます。（交の音kō が訛ってkyō となった）子が父と交わり、父の言動をまねることは子の立場からは〝学ぶ（古くはまねぶ）〟ことであり、これを父の立場から言えば〝教える〟ことになるのです。学の字は、古い形は〝𦥑〟であって、それは〝視界を閉ざされた子供〟、つまり無知蒙昧な子を表わしています。臼は両手を表わしていて、その蒙を啓（ひら）くこ

とを表わしています。従って、學という字は、子が父と交（××）わって父の美点を真似ることにより、自ら蒙を啓いていくことを表わしたもの、ということが出来ます。

これが親の立場から見れば「啓蒙してやる」ことになり、〝教える〟ことになることは先に述べた通りです。

文化は文治教化（ぶんちきょうか）

文化という言葉はわが国の昔の年号にも使われていてなじみ深い言葉ですが、その意味は「武力を使わないで人民を教化する」こと、つまり〝文治教化〟の略語で現在の使い方とは違っています。現在のそれは英語のカルチャーの翻訳語として使われ始めたもので「学問・芸術・道徳・宗教・法律・政治・経済の総称」であり、「理想を実現するための人生の過程」を意味する言葉として使われています。

さて、文という字は、〝説文〟によりますと、「線を交錯させて作った形」の字であり、「線の交錯によって描き出された模様」という意味の字である、と解説されています。漢字そのものも「線の交錯によって描き出されたもの」ですから昔は漢字を〝文〟と呼び、またその集まりも〝文〟と呼びました。後に前者は〝文字〟、後者は〝文章〟と区別するようになりましたが、英語のレターは今でも二つの意味に使われています。

漢字は〝明〟のように二つの漢字を組み合わせますと次々に新しい字が生まれます。こうして生まれたものを〝字〟と名付け、父母である〝文〟と合わせて〝文字〟と呼ぶようになりました。化という字は、人と人の倒れた形の■（■）との会意字です。説文には「教えがよく行われる事」とありますが、そもそもは「人が倒れて死ぬこと」「大変なこと」を表わした字です。小さな変化を変と言い、大きな変化を化と言うわけです。「お化け、

化合、化粧、化学」などと使われています。文は、文字にせよ文章にせよ、内に中身があって、これを外に表現したものです。だから、文とは中身（質・実質）に対して、「外見」「装飾」を意味します。

孔子が「装飾が中身以上に立派なのも、その反対に貧弱なのも、どちらも良くない。文と質の両者が程よく調和されていてこそ真に立派と言えるのだ（文質彬彬としてしかる後に君子なり）」と述べていますが、文化の理想は調和が大事だと言えましょう。

中秋（ちゅうしゅう）と仲秋（ちゅうしゅう）

仲秋は八月の意名ですが、中秋はその八月のまん中の日、十五日のことを言います。それで八月十五夜の月を〝中秋の名月〟と言うのです。

兄弟の順序を表わすのに「孟（伯）仲・叔・季」という言葉がありますが、季節の順序を表わすのにもこれを借りて〝孟秋・仲秋・季秋〟というように呼びます。

陰暦では七・八・九が秋ですから、七月が孟秋、八月が仲秋、九月が季秋です。また、孟秋

の代わりに初秋、季秋の代わりに晩秋という言い方もあります。

孟という字は、萌（芽ばえ、初めという意味）と同音でありその意味を借りた〝皿（メイ・モウ）〟と〝子〟の形声字で、「初めの子」つまり〝長男〟〝長女〟のことを表わした字です。

季は、稚（チが変化してキ）の省略した形の〝禾〟と〝子〟との会意形成字で、「幼稚な子」つまり〝禾っ子〟のことを表わした字です。（春秋時代、呉の賢者と呼ばれた〝延陵の季子〟季礼は、呉王の末っ子、第四子として生まれました）。

春夏秋冬の末の月である三月、六月、九月、十二月を〝季月〟と言いますが、それはそれぞれの変わり目にあたっていますので、この変り目のことを〝季節〟と言い、ついで今の〝季節〟の使い方が生まれました。

秋は、稲が実って穂が垂れている形を表した〝禾〟と熟の意味の〝火〟との会意字です。

稲の熟する季節を表わしたものです。

一年のうちでもっとも重要な時期なので、秋という字を〝重要な時期〟という意味に使うことがあります。（例、危急存亡の秋（とき））。

また、秋を〝年〟の意味に使うことがあります。（例、一日千秋の思い）中国でブランコのことを鞦韆と言いますが、元は秋千で、千秋を逆さに言ったものです。漢の武帝が後宮にこれを作り、長寿を祈る意味で〝千秋〟と名付けたことに因ります。

夏炉冬扇（かろとうせん）

暑い暑いと言っているうちに冬です。夏には欲しい扇子も冬は邪魔です。このように季節に合わぬ無用の長物を〝夏炉冬扇〟と言います。

さて夏という字は、古い字形は〝𡚬〟で、説文には、頁（頭の意味の部首）と臼（両手を表わす）と夂（止を下向きにした形で足を表わす）との会意字だとあり、〝中国人〟を表わした字だとあります。それは「手を拱（こまね）き、すり足で歩く、礼容威儀の立派な人」という意味で、中国人を表わしたものだというのです。ところで、紀元前二千年の中国に存在したとされる最古の王朝（後世聖天子と仰がれる禹王が建国し、十七代四百四十年続いて紀元前一七六六年に殷の湯王に滅ぼされたという）の名が〝夏〟でした。それで、中国最古の王朝の名がそのまま中国の意味に使われ、従ってまた中国人を意味するようになったとも考えられます。

夏が現在のように四季の一つを表すようになったことについては三つの説があります。夏という字は、古くから「立派」「盛ん」などの意味に用いられていましたので、四季の中で草木の最も盛んに繁茂する季節を〝夏〟という字で表すようになった、というのがその一つです。次は「夏は人が手足を投げ出してくつろいでいる形を表したものである」とし、そうなる季節をこの字で表したというものです。第三は、夏は暑いので〝火の季節〟と呼んでいたが、火と夏とは同音なので〝夏の季節〟とも書かれ、夏が季節となったとするものです。冬は、夕（音はシュウまたはトウ）と冫（氷を表わす）との形声字で、氷の張る寒い季節を表わしたものです。氷がこおることを〝凍〟というのは、冬と同じ音の東を借り、これに氷を表わした冫を加えて作ったものです。また、冬は一年の終りですから、この冬に糸を加えて〝終〟という字を作り、糸の終りの〝結び玉〟を表わす字としました。今は広く〝おわり〟の意味に使います。